



Education 2030

(OECD)

『“vuca”な世界を生き抜く力』

Volatility (激動)

Uncertainty (不確実)

Complexity (複雑)

Ambiguity (曖昧)

Agency (責任主体性) / Co-agency (共同主体性)

[自己に関わる力] / [社会性に関わる力]

- OECDレポート(2015)が掲げる「非認知」

“Skills for Social Progress : The Power of Social Emotional Skills”

- 「認知」「非認知」スキルが予測する多様な心理社会的適応
- 所得は「認知」だけでは説明され得ない→「非認知」の重要性
- 「非認知」→「認知」の因果関係は“robust”: その逆因果は×
- ターゲットとする「非認知」=「社会情緒的」スキル
- 個人および社会における生産性への寄与が期待されるもの・成長可能性が見込まれるもの・測定可能なもの
- 「**長期的目標の達成**」/「**他者との協働**」/「**感情の管理**」
- 「スキルがスキルを生む」(Skills beget Skills)
- 殊に社会情緒的スキルの土台を就学前期に築くことの重要性
→ “**Starting Strong**” 「人生の始まりこそ力強く」

● 子どもの発達と教育をめぐる世界的動向

(e.g. OECD諸国の動き)

- 見直されつつある「発達早期」の重要性
- 生涯発達の土台形成：高度な学校教育も確かな「土台」の上に積み上げられてこそ成果を挙げる
- 見直されつつある「非認知」の大切さ
- 心身の健康や幸福に至る基礎工事＋「認知」「学力」も「非認知」の支えがあってこそ確実に伸びる
- 「非認知」の中核→自己と社会性の心の力
- それを育む揺りかごとしてのアタッチメント

自己と社会性の力≡「非認知」

- 「自己」にかかわる心の性質（基盤としての自己信頼）
（自分を大切にし、適切にコントロールし、もっと高めようとする力）
「自尊心/自己肯定感」・「自己理解」・「意欲/内発的動機付け」
「自己効力感」「自制心/グリット」・「自立心/自律性」 など
- 「社会性」にかかわる心の性質（基盤としての他者信頼）
（集団の中に溶け込み、人との関係を作り維持していくための力）
「心の理解能力」・「コミュニケーション力」「共感性/思いやり」
「協調性/協同性」・「道徳性」・「規範意識」 など
- 両側面に関わる「感情の制御・調節」
（異時点間選択のジレンマ / 自他間選択のジレンマ 解決）

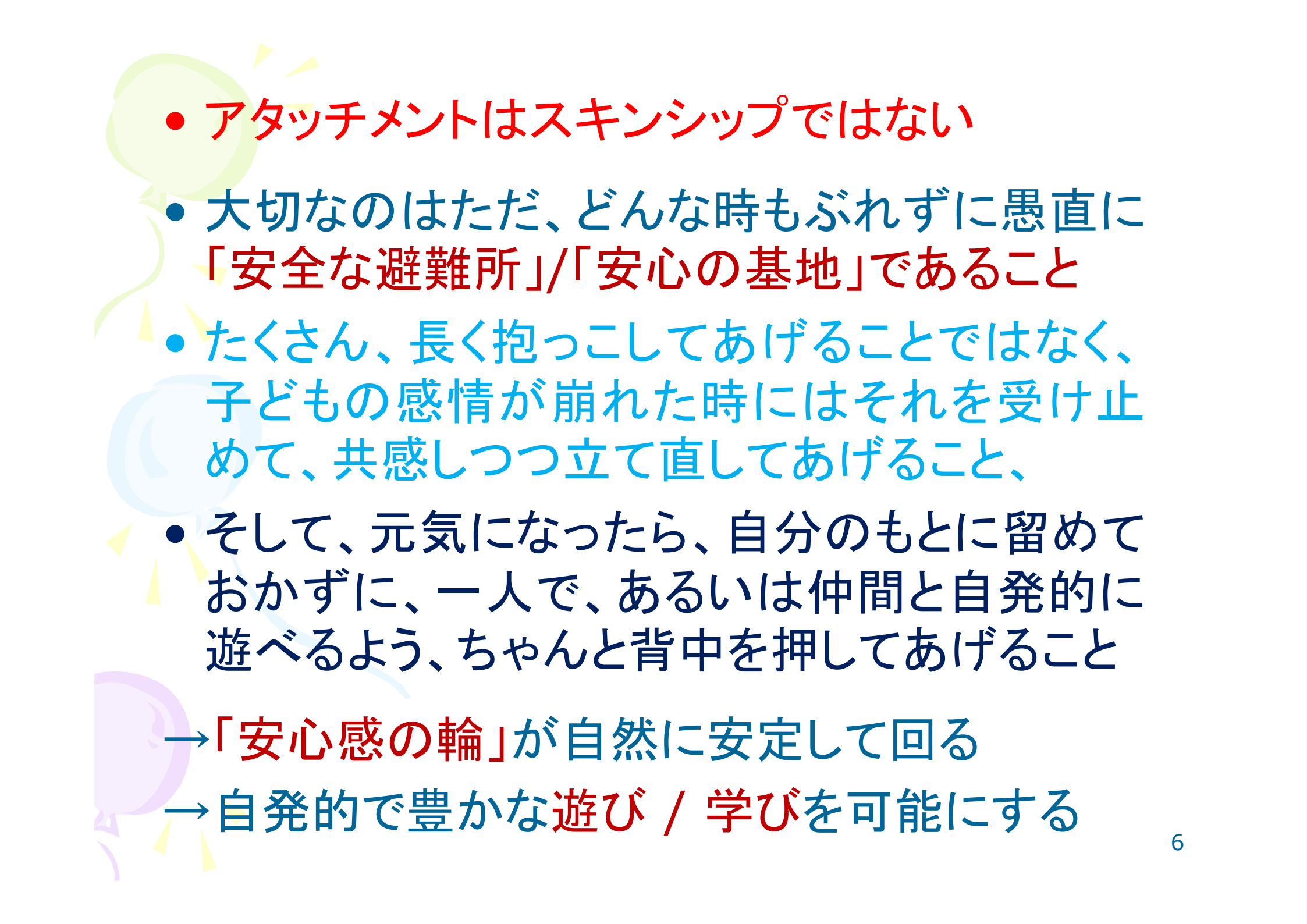
- **アタッチメント** =

何らかの危急時あるいは危機が予期された時に生じる
恐れや不安などのマイナスの感情を、特定の誰かへの
くっつきを通して調整しようとする心および行動の傾向

- 1人の感情の崩れを2人の関係によって立て直す

- 特定の誰かへのくっつきを通した「**安心感**」の確保
- 保護してもらえることへの確かな「**見通し**」
- 「見通し」に支えられての自発的「**探索**」
- 「一人でいられる能力」= **自律性の獲得・拡張**

「安心感の輪」(circle of security)



- アタッチメントはスキンシップではない

- 大切なのはただ、どんな時もぶれずに愚直に「安全な避難所」/「安心の基地」であること

- たくさん、長く抱っこしてあげるのではなく、子どもの感情が崩れた時にはそれを受け止めて、共感しつつ立て直してあげること、

- そして、元気になったら、自分のもとに留めておかずに、一人で、あるいは仲間と自発的に遊べるよう、ちゃんと背中を押してあげること

→「安心感の輪」が自然に安定して回る

→自発的で豊かな遊び / 学びを可能にする

- ・ 「安全な避難所」としての大人の役割
- ・ 崩れた感情に寄り添い、共感的に受け止め、それを映し出す
→心の理解能力・共感性・思いやり...
- ・ 崩れた感情を立て直し、安心感を回復させる
→自分や他者への基本的信頼
「自分には愛してもらえる価値がある」「他人は信じていい」
→自律性・心のたくましさ
「何かあったらあそこに行けばいい」という見通しに支えられた自発的な探索や冒険・新しいものへの挑戦

- ・ 「安心の基地」としての大人の役割

- ・ 安心感を得て、元気になった子どもを自分のところに留めておくのではなく、その背中を押して、また一人で探索や冒険に向かって行けるように離れたところから見まもり、応援してあげる
 - 自発性や主体性・意欲や内発的動機づけ・自己効力感・・・
 - 自律的・自発的な発見・探索を通した「学び」



- ヒトの子ども→未熟で脆弱に生まれてくる
子ども期が長い

- ヒトにおける養育負担の増大・長期化
→ヘルパー・サポーター(「繁殖協力」)の必要性



- 「父親」の参入(食物供給・防衛…)

- 「おばあさん」「きょうだい」の参入(直接的育児協力)

- 「集団共同型子育て」(Hrdy, S. B., 1999 [2005])



→allocare, alloparentingが広く遍く在る世界
セーフティ・ネットの多層性が子どもの発達の鍵

- 果たして現代の子育ては？

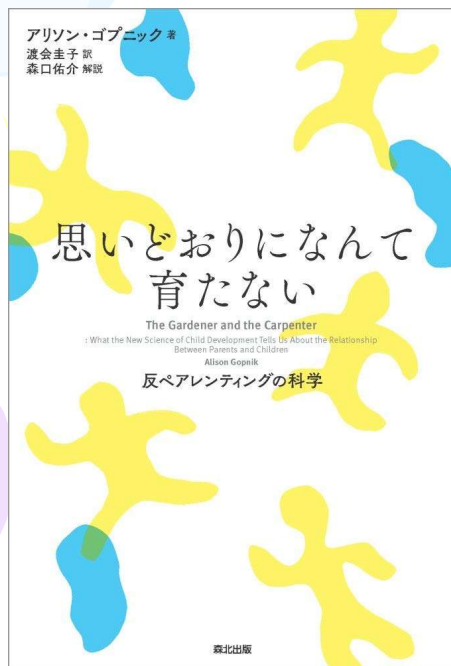
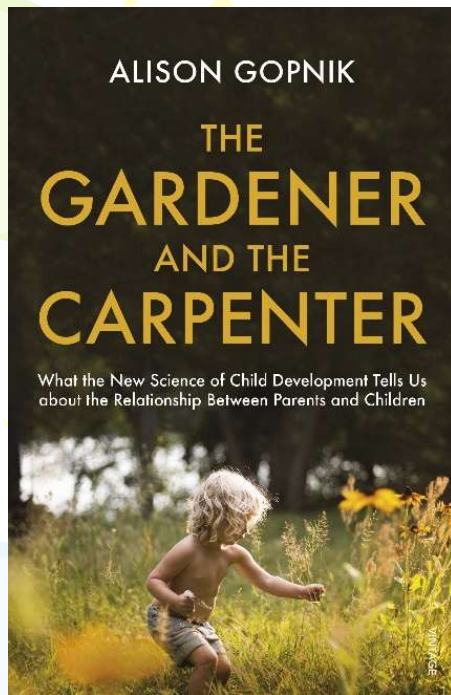
- 男女共同参画・「イクメン」・保育の拡充……

- しかし未だに「母子関係中心主義」が根強い
(ヒトの歴史の中では最近の文化的産物に過ぎない)

- 「母性的養育の剥奪」概念の功罪

- 子どもの発達に大きなダメージとなるのは特定養育者一人の剥奪ではなく、ましてや母親の剥奪でもなく、サポート・ネットワークの剥奪・不足

- 現代に適った「集団共同型」子育ての実現を!!



“Gardener”か“Carpenter”か

「木工職人」よりも「庭師」としての養育者・教師

思い描いていたたった一つの形、完成体を設計図通りに作るよりも、適宜、陽に当て、水やりをする中で、思ってもみなかったところに思いもよらない花を咲かすことを楽しむ

後ろをついて回ったり先回りしてコントロールするのではなく、「避難所」「基地」として、ただそこにあり続ける（見護り、探索を促す）こと、そして時に相互作用の積極的相手となることの大切さ

“Exploration”から“Exploitation”へ

子ども期における乱雑の中の「探索」こそが、その後の秩序の中の有効な「活用」につながる